

父親の育児

大阪教育大学 教育学部家政教育部門
教授 小崎 恭弘



父親の子育てが社会で注目されています。「イクメン」という言葉が出始めた頃には、いちいち「育児に熱心な男性・育児に積極的に関わりを持つとするパパ」などと説明が必要でした。しかし今となっては「イクメン」は一般用語として、すっかりと定着した感があります。いちいちもう説明の必要はないですね。「あの人はイクメン!」と言えば、みなさんに通じる時代となりました。

しかし日本には古来より、育児をする男性を指す言葉があったのです。みなさんはその言葉ご存知ですか？これ以外に難しいですよ。それは「父親」です。一瞬「ん？」と考え込んでしまいますが、よくよく考えればそうですよね。いたって単純なことなんです、これにはなかなか気づきません。

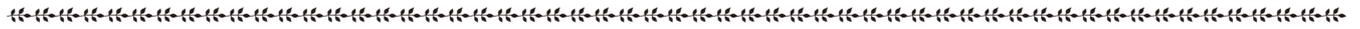
子どもを育てる男性が父親であるということは、なぜ社会で認識されていないのでしょうか。いくつか理由が考えられますが、その最も大きなことは「仕事中心の生き方」を男性が負わされてきたからだと思います。もちろん仕事はとても大切なことであり、生活の大きな柱だと思います。しかしあくまで仕事は生活の中の一部であり、同じぐらい家族を大切にしたり、また子どもを育てたりすることも生活の中には存在しています。しかし残念ながら、高度経済成長以降日本では子育ては女性の仕事とされ、男性は仕事だけをしていれば良いということになりました。

けれどそのような生き方自体が、時代や社会の変化に合わなくなってきたタイミングで、イクメンが注目を浴びたのです。これからの時代は男性も女性も仕事も、そして家族や子育ても大切にする生き方が求められてきます。生活の真ん中に自分を置いて、仕事も家庭もそして趣味や地域の活動など、様々な

ことを自らが主体となり楽しんでほしいです。これまで多くの男性は、自分の人生を生きることが下手でした。男性は「仕事中心の生き方」しか方法がなかったのです。その生き方自体を否定はしませんが、それは本当に自分が望む生き方なのでしょうか。子どもの素晴らしさを感じる、新しい生き方を踏み出してほしいと思います。それは「イクメン」としてではなく、父親として歩んでほしいです。

保育の営みは子どもの成長をその基盤におき、そしてそれらの良き関わりを家族や社会と共に行うことです。子どもの良き育ちは、保育のみで達成できるものではありません。また多くの子どもたちが幼稚園をはじめ様々な保育施設に通う現代において、施設のみで子どもが育つわけでもありません。家庭と保育施設がしっかりと手を携え、子どもを中心とした温かく柔らかな関係性の中で子どもたちが育つのです。これまでその家庭において、父親の存在感はあまりありませんでした。育児の主体として、父親が位置付けられていなかったからです。しかしこれからの多様化の進む社会において、父親もその親としての役割や責任、また同時に楽しみや喜びを大切にしていく時代となりました。保育に関わる人々の、父親に対する眼差しを変えるタイミングが来たと言えます。

子育てはとても楽しいものです。幼い子どもが日々成長をする過程は、何にも代えがたい喜びの一つです。そのことに一生懸命に関わることで、夫婦や親子が一つの家族となっていくのです。不透明で混迷の時代だからこそ、一步一步確実に家族を作っていくことを、父親からはじめてほしいと思います。そして父親を積極的に保育が支えて行って欲しいと思います。



新学期を迎えるにあたって

全日本私立幼稚園連合会
会長 田中 雅道

新しい子どもたちと共に新学期をスタートされたことと思います。新学期をスタートするにあたり、年間指導計画や月の指導案・週案など多くの書類を作成されたのではないのでしょうか。現代ではパソコンが普及していますから、一からすべての書類を書き直すのではなく、前年度の書類を一部修正する形で基本形は作成できます。

幼稚園教育にとって、各園で最も大切な書類は教育課程です。幼稚園教育を通して育てほしい姿が順を追って表現されているのが教育課程です。あくまでも育ていく道順の理論値ですから、園によって特に特徴が出せるものではありません。また、地域によっても大きな差があるとは思えません。ですから、必然的に同じような表現、文章になっていくのだと思っています。また、毎年変わっていくものだとも思えません。同じであっても自園が育てほしいと願っている姿を表現するものとして、微調整しながら考えて頂ければいいのではないかと考えています。

教育課程と似ているようで、微妙に異なるのが年間指導計画です。年間指導計画の段階になると、今、在籍している子どもの姿が投入され、理論値である教育課程を実現していく道順として具体的な内容が記述されていきます。今年、それぞれの子どもたちにどのような経験値を積むことに意味があるかを考え、毎年作成されていくのが年間指導計画です。その時にどの行事をどの段階で実施していくのかといった、具体的な内容までが決まっていきます。昨今のコロナの影響で年間の見通しすら立てにくい状況が発生していましたが、ようやく落ち着いて年間

を見通した計画が立てられるようになったのではないのでしょうか。私は、教育課程は作成することに意味があると思っていますが、年間指導計画は作成した段階で終わってしまうのではなく、常に子どもの変化を見ながら柔軟に変更をかけて実施していくものだと考えています。作成することに意味を置くのではなく、どう実施していくかに重点を置いてものになっていくことが望ましいと考えています。

文部科学省の発想として、学年を通しての子どもの育ちという発想が強いので、どうしても個の育ちよりも、集団としての育ちに視点を置いた発想が強くなるのですが、小学校も個の学びを重視するようになってきました。個の育ちの集大成としての集団の育ちがあるのだというベクトルが強くなってきていると思います。そういった発想を最も生かしていくのが、週案・日案だと思っています。計画は練るのですが、それを子どもたちに提案していく段階で、子どもたちの反応を読み取り、修正を加えながら活動を展開していくことが幼児教育では特に強く求められているのです。週案・日案はあればいいのではなく、実際にどう実施してどう変化したかの記述に意味があると考えています。いずれにしても週案・日案は作成することに時間を割くのではなく、どう実施するか時間に配分していくことが重要だと思っています。